

【書評・紹介】

佐々木 史郎 著『シベリアで生命の暖かさを感じる』フィールドワーク選書 13  
(京都, 臨川書店, 2015 年 3 月, 四六判, 231+v ページ, 2000 円+税)

津 曲 敏 郎

魅力的な書名が著者のシベリア研究へのまなざしとスタンスをよく表わしている。「生命」の読み方は本書中には示されていないが、著者の所属する国立民族学博物館のホームページ上の館員出版物紹介ページでは「いのち」とカッコ書きがあるので、それが著者の意図かもしれない。同館の研究者が多く執筆する「フィールドワーク選書」の 1 冊として刊行された。フィールドワークの成果やその手法について述べた書物は少なくないが、フィールドへ至るプロセスや研究者としての歩み、フィールドでの葛藤や悩みと喜び、現地の人々や研究者仲間との出会いと触れ合い、そしてそうした体験を通しての研究者としての成長について、フィールドワーカー自身が率直に本音で語る、というところにこのシリーズの狙いがあるようだ。まさに本書から読者は、シベリア文化人類学研究第一人者である著者の口から、研究の背景と舞台裏を知ることができる。

本書の構成は以下のとおりである。

はじめに

第一章 シベリア研究ことはじめ

第二章 トナカイ遊牧の世界

1 トナカイ飼育研究に着手/2 北欧でのサーミ調査/3 ネネツのトナカイ飼育調査

第三章 内モンゴル・エヴェンキの遊牧世界

1 中国でのフィールドワーク/2 内モンゴルのエヴェンキ/3 ソロン・エヴェンキの調査/4 ツングース・エヴェンキの調査

第四章 北方ヤクーチアの狩猟民の世界

1 ヤクーチアへの旅の始まり/2 最初のヤクーチア調査/3 クストゥール村での狩猟調査

第五章 厳寒のシベリアでの調査

1 マイナス四十度以下の世界とは/2 マイナス四十度の世界の服装/3 マイナス四十度の世界の家屋

おわりに/あとがき

「はじめに」の章に著者自身のことばで各章の簡単な紹介があるので (p.10)、それを引用しよう。著者が「シベリア研究を志すまでの学生時代の回想」をつづった第一章に続き、第二章は「修士論文を書き上げて研究者としての道を歩み始めたころから関心を持ち



続けている「トナカイ遊牧」の調査素描、続いて第三章では「国立民族学博物館に職を得て、新米の研究者になったばかりの頃に体を張って行った中国内モンゴルの草原地帯での調査」、第四章では「極寒のヤクーチア（サハ共和国）で敢行した狩猟とトナカイ飼育の調査」、そして第五章は「マイナス四十度から五十度の中で調査するための装備や心得」の紹介にあてられている。つまり、著者自身の経歴や社会状況の変化を投影した時間軸に沿って、北欧および西シベリアから中国内モンゴル、そして東シベリアに至る広大な地域を、読者は案内され、終章ではシベリアを生き抜く実践的な知恵を伝授される、という行き届いた章構成になっている。

「はじめに」の章ではまた、著者がシベリアに魅せられる理由として「冬の厳しい寒さ」と「人々の心の温かさ」をあげ、「あの心身をぎゅっと引き締めてくれる冷気、肌にはびりびりと突き刺さる冷たく乾いた空気、目の前に輝くダイヤモンドダスト、そして何よりも厳寒の中に暮らすからこそ湧いてくる人々の心の温かさ、このようなものに惹かれるのかもしれない」（p.9）と述べている。また、「そこ〔シベリアなどの寒冷地〕で感じる厳しさ、冷たさは実は自然環境から生み出されるものではなく、人が作り上げたものであることに気づいてくる。しかもそこに暮らす人々が作り上げたものではなく、そこに住んでもいないのに、そこを支配し、その資源を収奪しようとする人々が作り上げたものである」（p.9）という見方からは、歴史学者としての公正な判断と先住民に寄せる暖かいまなざしを読み取ることができる。

評者として個人的には、著者ととともに初めて訪れた中国内モンゴルの調査の記録（第三章）がやはり印象深い。ようやく海外の研究者に扉を開き始めたばかりの中国という未知のフィールドでの戸惑い、中国側メンバーとの軋轢、アルコールとの戦い、などが率直に語られ、苦楽を共にしたメンバーとしてはなつかしく思い返すとともに、これが中国での人文系共同実地調査の先駆けであったことにあらためて思いを馳せる。3年の計画でスタートした調査プロジェクトは、しかし、翌1989年の天安門事件で転向を余儀なくされる。そのことが結果的には、（中国以上に難関とされていた）ロシア・アムール流域でのツングース調査につながり、著者や評者らのその後の調査研究の方向性にも大きな影響を及ぼしたことには、運命の不思議さのようなものさえ感じる。

このようにフィールド調査は時代の政治的・社会的状況に左右されざるをえないが、第一章で述べられているように、著者のシベリア研究も文献資料からのスタートであった。フィールドができないことに「陸に上がった船頭」（p.28）のようなもどかしさや迷いを感じながらも、「フィールドができないことを言い訳にして」はならないと自分に言い聞かせて、ロシア語の研鑽やシベリア関連文献の吸収に努めたことが、その後のフィールドワークにも活かされ、著者の研究に広がりや深みを加えていることは言うまでもない。

フィールドやシベリア研究をめざす学生や若い研究者にとって格好の指針を与えてくれるのみならず、一人の研究者の生き方としても、教えられるところの多い好著である。

（つ magari・としろう／北海道大学）